

児童のいじめ防止活動に対する意欲の変容分析 —テレビ会議システムによる学校間交流学習の取り組みから—

Analysis of Motivation for Children's Bullying Prevention Activities: From the Approach of Inter-School Exchange Learning through Videoconferencing System

三苫 千恵^{*1}, 佐藤 直也^{*2}, 北澤 武^{*3}
Chie MITOMA^{*1}, Naoya SATO^{*2}, Takeshi KITAZAWA^{*3}

^{*1,2} 東京学芸大学教育学部

^{*1,2} Faculty of Education, Tokyo Gakugei University

^{*3} 東京学芸大学情報科学分野

Email: a151422f@st.u-gakugei.ac.jp

あらまし：本研究では、日頃から自校で取り組んでいるいじめ防止活動について、同地区の小学校の児童同士が遠隔支援システムを使って相互に議論する学校間交流学習を、2回、試みた。この取り組みにより、いじめ防止活動の意識がどのように変容するかを追究し、持続可能性の示唆を得ることを試みた結果、いじめ防止活動を継続して行っている学校の児童は、自分達の活動の良さに気づき、情報を得ることが満足度に繋がり、初めていじめ防止活動に取り組む学校の児童は、テレビ会議を通して、自分達の活動を発展させるような意識を高め、次の目標設定を行うことが、いじめ防止活動の持続可能性に繋がることが明らかになった。

キーワード：テレビ会議、遠隔、学校間交流学習、意欲変化、いじめ防止活動

1. はじめに

佐久間・朝倉 (2016) は、いじめを予防するには、子供のいじめに対する意識を高め、いじめを容認しない学校風土を作ること主張している⁽¹⁾。しかし、いじめの未然防止に取り組むことは、即効的な成果や取り組みの手応えが得られないと、どうしても取り組みが低調になったり、持続できなかつたりしがちである⁽²⁾。上白石 (2004) は、テレビ会議を活用した遠隔での学校間交流学習は、これまでのどの学習形態、学習環境にも見られなかった新規性、有効性に富んでおり、生徒が主体的に学びの場に働きかけ、知識を得ていくものであると述べている⁽³⁾。

そこで本研究では、テレビ会議を活用した学校間交流学習に着目し、いじめ防止活動に取り組んでいる小学生が自校の活動について議論することで、いじめ防止活動の意識がどのように変容するかを追究し、持続可能性の示唆を得ることを目的とする。

2. 手続き

2.1 概要

本研究の対象となった都内公立T小学校は児童が休み時間に学校の見回りを行うなど、長年、組織的にいじめ防止活動に取り組んでいた。一方、もう1つの対象校であるS小学校は、今年度、初めてT校のようないじめ防止活動に取り組んだ学校であった。

テレビ会議はZoomを用いて、計2回実施された(実践1：2017年6月29日、実践2：2017年10月19日)。実践1では、約30分間、お互いのいじめ防止活動の内容と、いじめ防止活動でいじめは本当に起きにくくなるのかについての議論がなされた。

実践2では、約50分間、お互いの小学校の近況報

告やいじめ防止活動において困っていることなど、対話形式の議論を行った。

2.3 対象

実践1は、T小学校6年生27名、S小学校4～6年生8名であった。実践2は、T小学校6年生16名、S小学校5、6年生14名であった。

2.4 質問紙

児童のいじめ防止活動に対する意欲の変容を分析するために、辰野 (2009) の12の要因を参考に、興味、知的好奇心、目的・目標、達成動機、不安動機、成功感、学習の結果、競争、動機づけ、システム評価、授業と評価に関する質問の22項目(5件法)と自由記述を問うた⁽⁴⁾。

2.5 分析方法

T小学校は、実践1と2に参加した児童の意欲の変化を見るために、Wilcoxonの符号付き順位検定を行った。その後、有意性がある項目をSpearmanの相関分析にて、他の項目との関連を分析した。

S小学校は、実践1と実践2のどちらか一方に参加した児童がほとんどであった。そこで、本実践後の各項目の肯定(4と5)、否定(1～3)の度数に着目し、二項検定で肯定、否定の認識を分析した。

3. 結果

3.1 T小学校

Wilcoxonの符号付き順位検定の結果、「1. テレビ会議は相手に気をつかう($p=0.096$)」(実践1： $M=3.33$ 、実践2： $M=2.38$)は否定的、「2. 他の学校の友達とテレビ会議をすることは大切だ($p=0.059$)」(実践1： $M=3.92$ 、実践2： $M=4.33$)は肯定的な有意傾向が認められた。結果、2回目の

テレビ会議の方が相手に気を遣わなくなり、かつ、テレビ会議の大切さを意識することがわかった。これら2項目(事後)と他の項目(事後)の関連を見るために Spearman の相関分析を行った。結果、項目1は、「テレビ会議で話をするのは難しい($r_s=0.86$)」と「テレビ会議でもっと発言しなかった($r_s=0.67$)」に正の中～強い相関が認められた。項目2は「テレビ会議でS小学校の友達と話をすれば、T小学校のいじめ防止活動の良いところに気づくことができる($r_s=0.69$)」、「テレビ会議でS小学校の友達にT小学校の様子を伝えれば、役に立つ情報を教えてもらえる($r_s=0.70$)」、「テレビ会議での話し合いに満足した($r_s=0.71$)」の3項目に正の中～強い相関が認められた。

テレビ会議のメリットとして「自分達の活動のいい点・悪い点がわかった」、「自分達の活動に自信が持てた」、「S小学校ががんばっているので自分達も頑張ろうと思った」という自由記述が得られた。デメリットとして「音が聞こえづらい」、「もっと長い時間交流して欲しい」という回答が得られた。

3.2 S小学校

二項検定は多重性の問題を回避するため、アンケートの項目順を考慮した Holm 法による有意水準を算出した後、有意性の判断をした。結果、4項目に有意差が認められた(表1)。項目14, 20, 21は肯定的、項目19に否定的な認識であることがわかった。

自由記述では、「いじめをなくしていきたい」という回答が得られた。

4. 総合考察

T小学校では、2回目のテレビ会議の方がテレビ会議で相手に気を使わなくなることで、テレビ会議の大切さを認識したことから、テレビ会議の回数を重ねればこれらの認識がより高まることが予想される。

また、テレビ会議の大切さと相関関係の結果から、テレビ会議を行うことで自分達の活動の良さに気づき、S小学校から役立つ情報を得ることが、テレビ会議の満足度を高めるという因果関係があるかもしれない。相手に気を遣うことと話の難しさ、もっと話したいとの相関関係では、テレビ会議の回数を重ねることが児童のテレビ会議に対する難しさを軽減させ、発言し足りないという思いを軽減させるのではないと思われる。

S小学校では、「自校のいじめ防止活動を広めたい」という気持ちが高まったことから、初めていじめ防止活動に取り組む立場であっても、テレビ会議を活用した学校間交流学習を行えば、自分達の活動を発展させるような意識を高められることが期待できる。「テレビ会議での話し合いをこれからも続けていきたい」という意識が肯定的であったが、いじめ防止活動を継続させるためには、次の話し合いの機会を児童に明確に示し、これに向けた活動の目標設定を行うことが重要である。

5. おわりに

本研究では、小学生を対象にテレビ会議を通していじめ防止活動についての議論、実践をすることでいじめ防止活動の意識がどのように変容するかを追究し、持続可能性の示唆を得ることを試みた。結果、いじめ防止活動を継続的に実施している学校では、自分達の活動の良さに気づき、情報を得ることが満足度に繋がる可能性が示唆された。初めていじめ防止活動に取り組む学校では、テレビ会議を通して、自分達の活動を発展させるような意識を高め、次の目標設定を行うことが、いじめ防止活動の持続可能性に繋がることが明らかになった。

今後の課題として、テレビ会議システムの音声、時間制限等の問題を改善することと、次のテレビ会議システムに向けた目標設定の在り方、テレビ会議システム後のいじめ防止活動の質に着目した研究が求められる。

謝辞

本研究にご協力いただいた児童、教員の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 佐久間浩美, 朝倉隆司: いじめを容認する態度といじめに関わる役割行動に関する検討. 学校保健研究 58(3), 131-144 (2016)
- (2) 文部科学省: 問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方. 国立教育政策研究所 (2010)
- (3) 上白石修: テレビ会議を活用した遠隔での討論学習における指導過程の工夫と多地点間交流の意義. コンピュータ&エデュケーション 16巻, 33-37 (2004)
- (4) 辰野千壽: 学的根拠で示す 学習意欲を高める 12の方法. 図書文化, 東京 (2009)

表1 質問紙の結果 (二項検定: 有意差が認められた項目のみ抜粋)

項目 (番号は項目の順番を意味する)	肯定	否定	p 値	有意水準
14. テレビ会議でもっと多くの人に、S小学校のいじめ防止活動を広めたい。	14	4	.031	.032
19. テレビ会議で話をするのは、難しい。	4	13	.031	.043
20. テレビ会議に参加してよかった。	15	3	.008	.045
21. テレビ会議での話し合いをこれからも続けていきたい。	14	3	.031	.048

※有意水準は Holm 法により項目順を考慮した有意水準を採用した。